

中国内陸農村訪問調査報告 (7)

祁 建 民

The Report of House-to-House Investigation in Rural Community
of Inland China (7)

Jianmin QI

概 要

本稿は、2015年9月に筆者をはじめとする中国農村研究者が中国河北省S県W村とQ県Z村及び山西省L県G村と「四社五村」で実施した聞き取り調査の報告書の一部である。老農民・幹部経験者・村落婦人・農村教師など農村の諸階層から聞き取り調査を行い、1940年前後を起点とする70余年間の農村社会経済変革の歴史的過程を追跡した。その際に、農民との質問応答録を原則としてそのまま収録することによって、村落社会経済の多様な面に注目し、村民の視点に立った家族社会史・村落経済史の再構成を目指した。

キーワード：中国内陸農村、個人史、家族関係

2015年9月に、筆者をはじめとする中国農村研究者は、中国河北省S県W村で聞き取り調査を実施した。また、今回の訪問では、W村の他に、Q県Z村（1940年代日本側によって調査を実施された村）を訪問した。さらに、山西省L県G村と「四社五村」と呼ばれる地域の民間生活用水組織及び地方政府の水利行政機関を訪問した。四社五村の水利組織は明代から開始されたといわれ、1950～70年代の集団化を経て、今もその生活用水（湧き水）の水権をめぐって、国家水利機関の管理・介入に抗して、自立的な運用を保っている。なお、以上の訪問調査は、河北大学華北研究センターと山西大学中国社会史研究センターの協力を得て、日中両国の共同研究として実施した。本稿でも『中国内陸農村訪問調査報告 (6)』と同様に、プライバシーの保護に配慮して村民の実名の表記は極力避けるようにした。

このプロジェクトは、2013年より5年間の予定で開始された、平成25年度基盤研究 (B) (海外学術調査)「華北農村訪問調査による近現代中国農村社会経済史像の再構築」(研究代表者 弁納才一・金沢大学教授)及び2012年より4年間の予定で開始された平成25年度基盤研究 (C)「水と権力—中国の水利問題からオリエンタル・ディスポティズムの再検証—」(研究代表者 祁建民)によって実施している。

一、河北省S県W村

(1) 楊HM

被訪問者：楊HM

場所：W村敬老院

日時：2015年9月15日午前

現在S県のある企業家が村のすべての耕地を請負した。貸借料金は、村民に1畝に年間1200元を支払う。村の灌漑用水はすべて地下水を利用する。灌漑の時に、人を雇うが、その給料の基準は1畝に50元である。トウモロコシの価格は、昨年国家の買い上げ価格は1斤に1.15元であるが、麦を買い上げる人が少ないので、1斤に1.15元であった。このあたりでは、トウモロコシを収穫してから麦を播種する。普通には、10月1日前後に、麦を播種し、翌年6月に麦を収穫する。村民の食用野菜はすべて外から購入する。農業以外に、この村では、養豚業をするのは1世帯で、20頭くらいを飼う。養鶏業をするのは2世帯である。卵は外部から来た人が買い付け、価格は1斤に4.4元くらいとなる。

楊HMは、県城にある高校を卒業して、県の水利局打井隊（井戸を掘る隊）で10年間勤務した。1976年唐山大地震の後、唐山に行って、井戸を掘った。当時そのあたりの井戸は殆ど破壊されていた。この村には、井戸が多く、深さは200メートルくらい。1984年に村に戻った。水利局に勤務した時、給料は月に18元、後は35元になった。現在村の灌漑用の井戸はすべて耕地を請負する人に所属している。家の井戸の深さは40～80メートルくらいである。村は1980年には、水道を敷設したが、その後壊されて、だれも修理しなかった。そこで各家は各自で井戸を掘った。家の井戸が浅いので、井戸水は直接飲めなく、湯を沸かしても、水の表面に油が浮かんでいる。楊の家の井戸の深さは44メートルで、水質が悪く湯垢が多い。深さ40メートルの井戸を掘る費用は2000元程度で、ポンプで水を吸い上げて、一度稼働し、家の貯水器で水を貯めて、いつでも使用できるようにしている。

(2) 孫JM、張ZH

被訪問者：孫JM、張ZH

場所：W村敬老院

日時：2015年9月15日午後

孫JM

妻は亭郷北庄の人で、すでに亡くなった。本人は小学校を卒業してから村で農業に従事していた。集団化の時に、第四生産隊に所属した。この村には、孫姓の人が10世帯で、昔西庄から来た。子供は二人で、長男と長女ともにこの村で農業に従事していた。

1966年の文革の時に小学生だった。紅衛兵は二つの派閥に属した。一つは紅衛兵造反団で、もうひとつは紅占軍だった。

1958年以降、このあたりに多くのダムを建設した。例えば、西太洋ダム、王快ダム、劉家台ダムなどである。

生産隊の時代に、第四隊が製紙工場を経営した。

1983年に、請負制が始められた。一人当たりに1.7畝の耕地が配分された。現在村の耕地はすべて他の人に請負されている。わが家は7畝くらい貸し出した。1畝に年間1200元の貸出料を得る。

本人は昔建築隊で働いた。初めの時、1日の給料は3、4円で、最後に1日100元くらいだった。今年までずっと働いていた。

張 Z H

妻は劉 L J で、本村人である。子供は6人であり、息子5人、娘一人である。長男は村で使い捨てられたプラスチックを買い付ける。次男は村の積み下ろし隊で働き、三男は村の建築隊で、四男は村でプラスチック材料を砕く工場で、五男は何をしているか分からない。娘は李各庄に嫁いだ。

本人は夜学の速成班で4、5年間勉強した。集団化の時に、第3生産隊に属していた。

父は張 X R で、中農で、家は17畝の耕地を有した。

大躍進の時に、ダムを建設し、井戸を掘った。1956、1957年から井戸を掘った。五排架子で掘り、張 Z H は班長で、井戸の深さは17メートルくらい。

当時、トウモロコシ、雑穀、麦を栽培していた。

困難時期には、食糧不足で、野菜、綿の種の殻や、河の雑草を食べ、浮腫が起きていた。国から救済食糧を貰ったが、量が少なかった。

1958年から大食堂を設立し、一つの生産隊に一個の食堂があった。3隊の食堂は始めの時には、良いのだが、後で食糧が少なかった。1958年の農作物の大半は収穫できず、畑で腐った。

大製鉄運動では、各生産隊も製鉄をしていた。石がなく、煉瓦で高炉を作り、鉄は出来なかった。

3隊の食堂は、料理人が3、4人で、管理員は周 H X であった。周は当時40～59歳くらい。四清運動の時に、周は批判された。彼は管理員の時に気性が悪かった。彼は「当時窩頭（トウモロコシの蒸しパン）を用いて豚に餌を与えた」と批判された。

文革の時に、幹部は批判された。

生産隊の時代に、副業を経営していた。

請負制が導入された後で、張は泥工をやった。家は8人がいるので配られた耕地が多い。トウモロコシ、麦と綿を栽培した。綿の栽培するのは労力かなり費やし、虫害が多く、後で栽培しなかった。

一時にアイスキャンデーを販売した。自前でアイスキャンデーを作って、冬に河から氷を取って、打ち砕いて、塩を撒いて、回って販売していた。

その後ひよこを孵していた。オンドルの上に受精卵を置いて、更に布団を被せて、1、2時間に一度ひっくり返し、21日後にひよこができた。ひよこの価格は1羽に0.1元くらい。2、3年間やった。後で村の水道の建設に従事した。

現在、耕地はすべて5人の息子に分配した。生活費は息子たちより提供された。医療手帳を持っているので、医療費は清算できる。

抗日戦争の時、鉄道橋の両側にトーチカが建てられた。県城の特務隊と警察隊がよく村に来た。物を奪った。張の家は橋から離れた。日本人が来たこともあった。人を殴ったことがあったが、人を殺したことはない。八路軍が夜に来たことは聞いたことがある。

張は兄弟が3人で、彼は3番目である。一番上の兄は八路軍ゲリラ部隊に参加した。解放戦争の時に、村を守った。解放以降に、彼は生産隊長を務めた、中共黨員である。

2番目の兄は1949年に人民解放軍に入隊した。除隊後に、河南省鶴壁市で仕事に従事した。

張は1950年代に入党した。1952年にハルビンに行った、臨時雇いの仕事をした。村の人によれば、そちらで仕事があるとそうだ。1年間離党したので、共産党を除籍された。

張という姓はこの村に多く、大家族である。1、2張姓の世帯のみ同族ではない。わが張姓の墓地は昔一緒で、先祖からの共同財産があった。毎年旧暦の10月1日には「吃坟神」を行った。だれかがこの土地を耕作すれば、だれかが食事を提供し、同族の間は輪番で耕作した。あんこ饅頭と饅饅 (he le) (雑穀で作った面料理) を食べる。あんこ饅頭は一人に一個で、あとは饅饅を食べ、饅饅の材料は蕎麦或いは高粱である。

解放以降、「吃坟神」の習慣は無くなった。私たちの祖先は山西省大槐樹から来たといわれている。

村には昔4、5軒の廟があった。天皇廟 (玉皇廟?)、竜王廟、老母廟と招魂廟 (その中に、小鬼、判官など祭られた。閻王廟とも呼ばれた)。天皇廟が一番大きい。廟は土地改革の時に打ち壊された。玉皇廟の場所はこのあたり (敬老院) である。昔の廟会の開催場所はよく変わった。戯曲を上演した。亭郷には廟会が催された。その廟は奶奶廟と呼ばれ、「保平安」の神だ。すべての廟も「保平安」のために建てられ、祭られた。

(3) 楊HM

被訪問者：楊HM

場所：W村敬老院

日時：2015年9月16日午前

楊HM 1954年生まれ、60歳、サル歳。8歳に本村の小学校に入学し、本村の中学校を経て、県城の高校を卒業した。

妻：W L X、蘇辛庄の人、1952年に生まれ、62歳である。長男がこの村で住む。長女は石家庄鉄道学院の大学生である。

父：Y Q L、解放前にハルビンにいった。北方大厦で働いた。その後祖母もハルビンに行った。

祖父：Y D H、解放前に解放軍に入隊し、徐水戦役で戦死した。

1963年、祖母と楊が村に戻った。その後、母も村に戻った。父はハルビンで定年した後再婚した。昔私年に一回ハルビンに行った。

祖父は戦死したが、その烈士証明書は叔父が持っている。4番目の叔父もハルビンに行った。

楊は1973年に高校を卒業してから、県の井戸を古掘る隊に就職した。「完県水利局打井隊」と呼ばれる。全隊で40～50人くらいで、3人で一組を組んだ。山のところで、井戸の深さは100メートルくらい。1日水量は「4進3出」、即ち4寸のポンプで3寸の水量が出る。

井戸の位置は測量隊によって決める。県測量隊が水脈を発見し、地区の水利局に申請して、認めれば、国家から資金交付し、打井戸隊で井戸を掘る。100メートルの井戸は半年或いは1年間費やした。電動機を使ったが、よく停電したからである。

当時、楊たちは村で住んで、村に糧票を払い、村の料理人がご飯を作ってくれた。

楊の給料は始めの時、月に18円で、野外仕事手当と合わせて35円である。収入は高い。

当時井戸の深さは山のほうは100～200メートル、平原では20～30メートルである。その時、主に山のほうで井戸を掘る。井戸を掘り終わった、ポンプとトランスを取り付けてから、一緒に村に渡す。

1976年の唐山大地震の後、玉田県に行った。地震で向こうの井戸が全部壊れた。

昔の測量器具はだめで、よく井戸を掘ったら、水が出なかった。現在の測量器具はいいので、掘ると水が出る。当時の諺によれば、「両山挟一条」、即ち両山が挟んでいる谷に水脈がある。当時、康関村は最も水不足で、幾つの井戸を掘っても水が出なかった。

現在、平原地帯で井戸の深さは40～50メートルだが、水の質が悪い。わが家の井戸の深さは60メートルだ。もし200メートルまで掘ると、湯垢が無い。数世帯で一緒に深い井戸を掘ったことがある。

わが家の井戸の深さは60メートルで、1、2千元を費やした。井戸が深ければ、鉄のパイプが必要だ。浅い井戸はコンクリートのパイプが使える。

現在では、国は灌漑用の井戸を掘るに対して、補助金を出すのが、自家の飲用井戸の掘るには補助金を出さない。しかし、政府は深い井戸を掘ることを勧めた。

昔、政府が曲逆河の西太平洋ダムを建設した。この村の北側には水門を作った。

1980年代以降、西太平洋ダムの水は殆ど保定に給水している。地下のパイプで給水した。この村の水門には水が無くなった。曲逆河の水源は山の雨水、西太平洋ダムに貯めた。順平県の西側は伊祁山がある。それは太行山の一部だ。

現在の打井（井戸掘り）隊は個人によって請負した。その後楊は徐水に行って、井戸を掘った。収入は低かった。その時この村は耕地が配分された。楊は1.2畝が配分された。

2年前に、工業区を建設するため、耕地は収用された。1畝に5万元だった。現在、この老年活動中心で働き、すこし収入がある。

昔、楊の息子はプラスチック加工をやったが、環境汚染で止めた。「九・三軍事バレット」の時に、止められた。いま、使い捨てのプラスチックの回収市場も閉じた。原料は無くなった。一部のプラスチック工場は他のところで回収している。

文革の時、私は小学生だった。紅衛兵の派閥は、一つは造反団で、もうひとつは紅衛兵だった。造反団は生産大隊の事務室を占領した。紅衛兵は小学校を占領した。授業が出来なくなった。

1975年には、保定の各県で「武闘」を行われた。車で保定に行って、地区招待所を包囲した。この村の周JBは壁新聞を書くのは得意で保定でかなり有名だった。

請負制の後、井戸はすべて個人で請負した。初めは村の電気管理者が灌漑の井戸を管理した。村民がポンプの電気料金を払って、彼は電気代金を徴収した。

現在の敬老院の場所は昔天王廟があった。1930年代ここに小学校が建てられた。その後、收購站、供銷社、幼稚園が再建され、2013年に敬老院に変わった。

この敬老院は県の民政局が投資した。初めに県民政局がこの村に「蹲点」（幹部が長期間村に調査研究または活動をおこなう）したことがある。廟は解放以降、打ち壊され、小学校、中等学校と戯台が建てられた。

(4) 王C J

被訪問者：王C J

場所：W村敬老院

日時：2015年9月16日午後

王C J：79歳、牛年、1937年生まれ。妻：Z R X、75歳、蛇年、1941年生まれ、東閭庄の人。長男、この村で積み下ろしの仕事、次男、使い捨てるプラスチックを買い付け、長女、東閭庄に嫁いだ。

父：王C L、解放前に1畝を所有し、また、他人の土地を借りて耕作していた。そして同時に、小商いをを行い、油、塩、醤油などを販売した。荷を担いで、近くの村を回った。土地改革の時に下中農に区分された。

王は、この村の小学校6年間通った。卒業してから、村で農作業に従事した。1962年に東北に

出稼ぎをした。

互助組の時に、6世帯が一緒に作った。王姓の人が多く、皆仲良く、家も近い。互助組が6、7年後に、初級合作社を作った。39世帯で、経営は良かった。その後高級合作社を作った。

集団化の時に王は2隊に属した。この村には生産隊が13個があった。王は10数年間生産隊の会計を務めた。

大躍進の時、大食堂を作った。初めの時から美味しくなかった。村で製鉄を行い、山に鉄鉱を探した。

困難時期には、食糧不足で、野菜、テンサイ（ビート）など食べた。

1962年に王はハルビンに行った。農場での大工だった。12年間滞在した。年に一回村に帰省した。当時、大勢の人がハルビンに行った。王は5、6人と一緒に行った。ハルビンでこの村の人もいた。その後殆ど村に戻った。

王は村に戻った時に、四清運動が行われていた。その時に生産大隊の幹部が批判された。

文革の時に、王は造反派に参加した。70、80人くらい、大体若者だった。大隊の事務室を占領しようとした。「武闘」も行われた。煉瓦を使って、投石した。造反派のリーダーは張J Tで、高校を卒業してから村に戻った。彼はその後大隊の幹部になった。一時公社で働いた、最後に村に戻った。

請負制の時に、初めに10数世帯が一つの組を作った。10年後に、世帯請負になった。集団化の時に綿を栽培したが、世帯請負になると綿を栽培しなかった。なぜなら、綿の栽培は収入が低かった。

集団化の時に、第2生産隊が副業を経営した。大工工場（木匠厂）がある。蒸籠（せいろ）を製造し、土産会社に売り出した。木材（松の木材）と竹は外で購入し、蒸籠の蓋は葦で作った。蒸籠は一つ（1尺6寸のサイズ）は13元だった。一つの利潤は10元くらい。王は会計を担当した。当時、生産隊の副業（農業以外の業種）はかなり儲けた。当時、硫酸を買って、燐肥を製造した。このあたりの土地はアルカリ性なので、酸性の肥料を使って、増産できる。

王は生産隊の会計も担当した。労働点数の記入、収入、食糧分配などの仕事だ。会計は昼間には農作業に参加し、夜には記帳した。会計を担当させる理由は王が小学校を卒業したからだ。当時の生産隊長は董X Mで、王に会計を担当させるのは社員より選出された。互助組の時から会計を担当した。

集団化の時、第2生産隊が一番成績が良かった。一つの労働点数は0.2元で、夜の打場（穀物の脱穀をする仕事）は一回5～10点で、時間の長さにより計算した。

当時食糧の分配は「人三労七」即ち、人数の分は3割、労働点数の分は7割を占めた。

請負制の時、「木匠厂」が解散された。王の世帯は一人1.1畝の耕地が配られた。現在すべて業者によって請負された。二人の息子は一人が月に100元をくれる。医療保険費も息子が支払う。軽い病気は村で診療を受け、重い病気は県城の病院に行き、今年1カ月間入院した。

二、河北省Q県Z村

被訪問者：栾Z X

場所：栾Z Xの自宅

日時：2015年9月18日午後

栾Z X：90歳、寅年、1926年生まれ。

妻：張X Y、85歳、羊年、大張庄の人。長女、本村；長男、本村、4年間解放軍に入隊した；次男、三男もこの村にいる。

土地改革の時、貧農に区分された。父栾Y Z、土地6畝を持って、土地改革で更に6畝分配された。

栾Z Xはこの村の小学校で4年間通った。その後農作業に従事した。1945年の時に、村の武装委員会委員になった。当時、日本軍はすでに降伏した。

日本軍はこの村で8年間に駐屯した。村で三つのトーチカが建てられた。警備隊は中国人により構成し、この村に駐屯した。三つのトーチカの中、一つは日本軍が駐屯し、一つは偽軍が駐屯され、一つは警察が駐屯した。

八路軍はこの村のトーチカを攻撃するのに、7、8日間掛った。日中戦争の時、この村も地下道を掘った。夜八路軍が来た。当時、冉庄の地下道を知っていた。

村には、日本人への協力者もいた。偽村長は王D X、聯保長は宋C Bだった。村には八つの保に分かれた。もう一人の聯保長は曲B Zだった。その時、昼は日本人がやって来て、夜は八路軍がやって来た。

中共の武装委員会のメンバーは6、7人で、民兵連は40人くらいだった。主な仕事は前線を支援し、労力を派遣した。

武装委員会の主任は劉Q Zで、当時20歳くらい。柴は1945年に入党し、入党紹介人は翟B Qで、彼はこの村の黨員だ。

1952年に初級合作社の紅旗社が設立された。この1年前に互助組を作った。互助組は14世帯より構成し、組長は王Y Sで、皆近くのところに住んでいた。

柴は1949年に副村長を務め、1952年に村長を務め、3年後に書記長になった。近くの三つの村の書記長だ。

当時この村13、14個の初級合作社が成立された。1958年に高級合作社が成立した。1955年には、毛沢東は消極的姿勢を批判したので、皆すぐ初級社を作った。一部の世帯は生産条件が良いので、退社しようとしたが、幹部が彼らを批判した。彼らは大体階級区分で上中農、富農のような人だった。彼らはいろいろ要求し、管理もしにくい。

土地改革の時、この村には、地主13世帯、富農20世帯が区分された。搾取率一番高い地主は石H Nで、2000畝を持っていた。その他、王R Tは200畝、王G Zは200畝をもった。

反革命鎮圧運動の時、常Y Gを銃殺した。彼は個人履歴を捏造し、外で国民党の活動に参加した。反革命分子として逮捕した。王Y Zは還郷団のメンバー、県城に住んでいたが、他の村で人を殺した。彼はこの村のある女性の乳房を切り、殺害した。この女性の夫は八路軍の副村長だった。王はこの村で銃殺された。

1958年の大躍進の時、村で10数個の高炉を作った。大食堂は17、18個くらい。食糧がある時は、いっぱい食べた。困難時期になると、一人に1日に食糧5両しかない。大勢の人が亡くなった。1960年に自留地が配られた。

四清運動の時、工作隊は満城から来た。当時、清苑、満城ともう一つの県と一緒に一つの大県になった。

工作隊の中に銀行の会計、県長、副県長及び県書記長がいた。

村の幹部を厳しく批判した。結局、二人の幹部を処分した。一人は大李各庄の一般社員にされた。もう一人は汶仁村に行かされた。彼はこの村の高級社の書記で、誤りを犯した。後彼をこの

村に戻させようとしたが、彼は拒否した。

文革の時には、派閥が二つで、一つは造反団、もうひとつは聯総だった。「武闘」が生じたが、死者が出なかった。

柴は文革の時、資本主義の道を歩む実権派（当権派）として批判された。劉少奇路線を歩むと批判された。

その後、公社の農機站到職した。トラクターの普及する仕事をした。やがて公社の敬老院で10数年働いた。最後に村に戻った。

現在老幹部として年に2回国から手当を貰った。解放前の党員は年に4000元、老幹部は年に1000元が支給された。

農作物では、解放前はトウモロコシ、高粱、粟、大豆などを栽培した。解放以降、綿を栽培し、栽培枠が定められた。毎年100～200畝くらい。請負制の後栽培しなかった。落花生の栽培も定められた。

水利工事は1958年に唐河を掘り、ダムを建設し、洪水冠水を防ぐ。

1958年に、井戸を掘った。「躍進井」という井戸の深さは2丈くらい。

王は、もしも共産党が無ければ、餓死になるかもしれないと考える。幹部としてずっと頑張ってきた。現在村の仕事に関心を持っている人はない。

集団化の時に王は幹部として、自らで労働点数を低く定められた。王は1日8点、妻は1日7点、子供たちが小学校を卒業してから村で農作業に従事させた。

王は解放前に、短工をやった。日雇いで、1日の給料は0.4元、食事は提供された。13歳の時に乞食をやった。満城の西苑に行った。家族全員が乞食をした。

(今年この村の書記長と村長ともに変わった。二人とも企業家で、村の長者である。新しい書記長は自動車学校を経営し、殆ど村にいない。新しい村長は大型トラックを数台もって、ガソリン、重油などを運送する)

三、山西省四社五村

王宝虎

被訪問者：王宝虎

場所：王宝虎の自宅

日時：2015年9月22日午後

義旺村の水日は7日から4日に減った。その3日の水日は孔澗村に与えた。杏溝村の副村長楊二娃は個人で仇池社の8日、南李庄の7日ともに買った。半月（14日）の水は杏溝村が所有した、生活用水問題を解決するためだ。義旺村は4日の水は不足だが、機械井戸があるので、用水は充分である。現在義旺村の村民の水道料金は無料だ。村長の朱兵兵が機械井戸の電気料金を払った。

今年の大祭は杏溝村が主催した。義旺村書記と村長が出席した。書記長は李双祐だ。

費用の分担は仇池社3600元、南李庄3000元、義旺1000元（水日が減るため）、孔澗村は千元未満だ。今年は戯曲が上演しなかった。大祭と小祭ともに会食し、分水亭から峪里までの水道の修理について相談した。

四社五村を無形文化財として申請する件はだめだそうだ。（2016年9月の調査によれば、省の無形文化財として承認された一筆者）

仇池社では、主社の水は余裕があり、その水は付属村の川草窪村、窯垣村に使わせている。大祭と小祭の費用は付属村より分担すべきだ。

沙窩村では、四社五村の水を使って、各世帯までの水道が出来た。水利局は四社五村に機械井戸を掘ったため、沙窩村がこの水を多めに利用できる。

現在、杏溝、孔澗と劉家庄は井戸がないので、四社五村の水を利用している。足りない分は機械井戸の水を使う。下の村は文句があるが、かまうことができない。いま、代表者として管理する人はなかった。

竜王廟はまだ沙窩村によって管理した。毎月一日と十五日は私が廟に行つて、線香を立て、供えものを捧げる。大祭と小祭の時に皆が線香を立てる。

現在、あまり仇池社に行かない。水が満足するからだ。昔よく行き、水を借りに行つた。

現在大祭、小祭ともに各村が参加し、仇池社が井戸の無い三村に水を与えた。このように水を借りることは、全て大、小祭の時相談した。

現在、機械井戸水でリンゴ園を灌漑し、1時間40～50元を徴収した。

義旺村の生活用水は無料だ。水道は各家までに通じた。高速道路のサービスエリアは自給分の井戸水が足りないため、こちらからも一部水を提供した。

分水亭から山の水源地までの道路を修復した。四社五村のお金で工事した。

機械井戸は2日おきに一回稼働し、14～15時間くらい。リンゴ園の用水は随時に稼働する。この井戸は1時間40立方メートルの水が出る。1ヶ月半連続で稼働できる。深さ510メートル、建設費用は110万元。井戸の維持修理および井戸からリンゴ園までの水道の維持修理費用すべて私が出資する。

リンゴ園経営者の収入は年に7000～8000元くらい、多いほうは1万元に達する。太原、北京まで輸出した。

リンゴの出荷価格は1斤に2.8元だ。また、この水を利用し、トマト、長ネギを栽培している。

近くの村は冷蔵施設がある。この村はない。来年、私は村で冷蔵施設を立てる予定だ。用地は2、3畝、資金は集金で集める。電力については、県の電力局に申請する。

井戸があるので、昨年降雨量が減少したが、農民の収入は30%増えた。

この村は4、5年前からトウモロコシを栽培し、小麦粉を購入する。トウモロコシは1畝の産量は1700～1800斤くらい、出荷価格は1斤に0.9元（今年）、昨年は1.1元だった。トウモロコシは灌漑する必要がない。

養豚、羊を飼う家があるが、ウサギを飼わなかった。ウサギの養殖は失敗した。

近年、リンゴ、トマトの栽培面積は数百畝拡大した。トマトは1畝の産量は1万斤、出荷価格は1斤に1.2元だ。

リンゴは90%以上が紅富士という品種を栽培した。紅富士がよく売れる。

今年、村10数世帯がリンゴ園合作社を組織した。農薬、化学肥料などの購入と使用を一緒にした。皆生産量が多い世帯だ。合作社の成立は県に申請し、手数料はいらぬ、支援もない、自らで創業した。

呼びかけ人は劉双平で、彼の世帯は生産量が多い。彼は現在47歳くらいで、10数畝をもっている。この前臨汾の果物育成訓練班に通つた。彼らとの間に栽培技術に関する交流もする。

四、山西省L県G村

(1) 李X H他4人

被訪問者：李X H、村長、祖父は革命烈士として、県志に記載されている。

李Z Y、82歳、戊年、元会計

李Z Q、70歳、戊年

李F S、63歳、蛇年、元小学校の先生

李N F、78歳

場所：G村事務所

日時：2015年9月23日午前

李N F

妻：李Z、本村人、75歳

1957年末、19歳の時初等中学校を卒業してから、人民解放軍に入隊し、1976年10月に除隊し、村に戻った。人民解放軍の指導員を務めた。除隊後、県の石炭運輸販売会社に転業（転職）した。1998年に定年した。

長男、県の銀行職員、次男、県の石炭運輸販売会社の社員、三男、県の病院の職員。

父、李R S、解放前土地8、9畝を所有していたので、中農に区分された。初級合作社の「金星一社」に全村が参加した。1957年に、李が入隊した時に、高級社になった。

入隊の当初、内モンゴルに駐屯し、その後湖南、河北、黒竜江、四川、陝西、新疆などに転々と移動した。鉄道兵なので、全国各地を回った。

抗日戦争の時、村の後ろの山の上にトーチカが建てられた。ちょうど李の家の上で、偽軍が駐屯し、李家に泊まった人は田隊長だった。

李X H

祖父の李R Hは学校に通った、李R Hの父李S Xは秀才で、村の村長及び学校の教員を務めた。家は村の一番高いところにある。その後国民政府双池鎮学校の校長を務めた。

当時、この村では夜は八路軍が来て、昼は偽軍がやって来た。李R Hは八路軍に情報を送った。その後沁源の八路軍県委員会で働いた。霊石で日本軍に逮捕された。その後行方不明になった。解放以後、革命烈士に認定された。文革の時に、批判されたが、文革後に、名誉回復された。

父の李H、学校に通ったことがある。解放初期、区長と村長を務めた。文革の時に批判された。「当権派」と言われて、更に彼の父李R Hは「香港に逃げ込んだ」と摘発され、烈士の名誉を取り消した。文革後、李Hが県に再審査を求め、名誉回復され、再び革命烈士と承認された。今年、郷政府は抗日老兵として登記した。その日村幹部たちは会議室で「9・3軍事パレード」を見た。

李X H本人は、1967年生まれ、中学校を卒業してから農作業に従事し、その後運輸業を経営し、さらに一つの炭鉱を請負した。従業員は60、70人くらいで、山東省、河北省から来た出稼労働者だ。昨年12月に村民より選出され、村長を務める。いま新しい村事務ビルを建設中だ。

村民委員会は5人より構成されている。村の大きなできごととは村民委員会と党支部委員及び12人の村民代表と一緒に相談する。この村の党員の人数は21人だ。

新しい建物（村の事務所、老人看護センター）の建設費は80万元、国家の「為民工程」より50万元を援助され、民政局から10万元を支援してもらった。その以外の分は村から出費した。

李N F

県の石炭運輸会社に務めた。いま村で生活した。L県の各郷には炭鉱がある。集団化の時、この村は野菜栽培基地だった。毎年、野菜の栽培が割り当てられた。灌漑は汾河から水を汲み上げた。野菜の栽培のは食糧生産より収入は高かった。当時、河の向こう側にある炭鉱には、従業員が3、4千人くらいいた。

汾西鉱務局の本部はここにあった。村民は1日の労働点数が10点で、2元に相当した。野菜を出荷して、国から食糧が配られた。主にトウモロコシ、小麦などだ。また、モモ、リンゴも出荷した。

「看青」もおこなった。当時、この村には生産隊が三つあり、一つのプロダクションから一人を派遣し、「照灘的」と呼ばれた。

この村では、80%の人は李姓の人で、その他、呉姓は1世帯、師姓は1世帯、郭姓もいる。李姓は二つの大家族に分けられた。即ち「城中李」と「西城李」で、城はL県の県城を指した。「城中李」には「三甲一戸」と「三甲五戸」という組織があった。清の時代には、公糧を納める時に、各甲里が自らで納めた。それぞれの「柜」の中に入れる。この李姓の祖先は200年前に、兄弟二人が県城からここに引っ越してきた。昔、李姓の墓地は一緒だ。いま私は「三甲一戸」の第15世代目だ。

靈石の「王家大院」の王姓はこの村から引っ越しした。豆腐を販売し、お金を儲けて、引っ越しした。王姓の祖先の墓はこの村に残した。

解放前では、清明節の前日に、李姓の男性は全員墓参りをした。昔家譜があったが、文革の時に焼き払った。

昔村に財神廟、子孫廟、土地廟があった。日本軍が来た時、建物を建てるためにすべての廟が解体された。抗日戦争時代には、日本軍はこの村で人殺したことがある。犬が人に噛みついて、殺害した。道路の傍には「万人坑」があり、昔毎年展覧した。

大躍進の時、村に高炉が三つ建てられた。

困難時期には、食糧不足で、一人に月10数斤しか配られていなかった。

文革の時には、工作隊がやって来て、幹部を批判した。

当時紅衛兵の組織は二つあった。一つは「東方紅」、造反派で、大体旋毛曲りの気難しい人だ。もうひとつは「兵団」で、保守的な大人しい人間だった。

李は当時黒竜江にいた、人民解放軍の指導員で、綏濱の村で四清運動を發動し、三人と一緒に、その年の冬はずっと綏濱の村にいた。村民と仲良く、村の新しい指導部を作り上げた。元の幹部たちは多少汚職をしたことがある。

文革の時に、李は四川で「支左」（左派を支援する）を行った。重慶市北碚区のある鉱山にいった。

(2) 李J L

被訪問者：李J L

場所：G村事務室

日時：2015年9月23日午後

李J L：37歳、羊年、1979年生まれ。村民委員会委員（事実上副村長）

中学校を卒業してから、石炭販売会社で4年間働いた。その後村に戻って、10数年間は無職だ。妻は嚴Y P、壇鎮の人で、子供二人だ。

昨年12月に村民委員として選出された。村の仕事以外に、父を介護する。父は県道路局の職員で、仕事中に病気になったので、道路局から介護費をもらう。

村民委員会の選挙は、鎮の幹部がやって来て指導し、村民全員出席し、投票した。鎮の幹部が票を読み上げ、村民も監督した。

元村長の李Y Jは昨年書記長を務め、元書記長は楡次に工場を経営しに行った。書記長は党员より選出し、その後村長を選挙する。村長の立候補は二人で、その人の人柄や人間関係によって当選した。村民委員会の立候補は5人で、4人が当選した。選挙の前に村長の立候補者は李と相談し、彼は村長立候補に出馬したいと言った。李は村の書記長と同族だ。

現在村民委員会と党支部委員会のメンバーは互いに兼任しない。村の重大事項は両委員会と村民代表と一緒に相談する。村のことは党支部より指導する。村の書記長は忙しいので、鎮のほうは普通村長と連絡する。

選挙の時、1世帯が全員出席しなくてもいい、一人が代理投票であるが、一人は最大3票まで投票できる。

今、村集団の収入は、幾つの企業が村の土地を借り、毎年借り賃を払うことによる。年間どのくらいかははっきり知らない。この借り賃は鎮より統一管理し、村が支出の時に、鎮に申請し、認められたら使える。村は招待費がない。

村にある企業は三つ、更にガソリンスタンドもある。

この村には村官がいる。大学の卒業生で、普通鎮にいて、村にもよく来る。

村の福祉として、村全員に3カ月に一度小麦粉1袋、粟(小米)5斤を配り、更に春節と中秋節には、一人にサラダ油2斤を配る。

農作物はトウモロコシで、野菜も栽培するが自給自足だ。この村では、耕地は一人に0.2畝しかない。

若者は大半村外で出稼ぎをする。村の企業はこの村の人を優先的に採用する。三つの企業は100人前後を雇っている。

村には、養蚕合作社がある。3世帯から構成する。

村の幹部は毎日忙しい、この村の村民は187世帯がいるからだ。